

原 著

思春期世代を教育する教員のDVの知識と 予防教育への考え

Teachers' knowledge of domestic violence (DV) and their opinion about DV prevention program for adolescents

須賀 朋子¹⁾ 伊藤 寿美²⁾ 森田 展彰³⁾ 斎藤 環³⁾

1) 国立茨城工業高等専門学校, 2) 茨城県立茎崎高校, 3) 筑波大学医学医療系, 社会精神保健学

1) Tomoko SUGA : Ibaraki National College of Tecnology, 2) Hisami ITO : Ibaraki prefectual Kukizaki high school, 3) Nobuaki MORITA, Tamaki SAITO : Social Psychiatry and Mental Health, Faculty of Medicine, University of Tsukuba

抄 録 : 本研究では, 第一段階で, 思春期世代を教育する教員242人と, 教員以外の大人481人のDVに関する考え方と予防教育についての意見の比較を行った。第二段階では, 教員242人の男性教員と女性教員の考え方や意見の違いの比較を行った。またDV被害経験の, ある教員と, ない教員の考え方や意見の違いの比較も行った。

第一段階の教員と, 教員以外の大人の比較では知識や予防教育についての意見に差がみられた項目は1項目のみであった。しかし第二段階の教員内での比較では, 女性教員が男性教員に比べて, DVの特徴を正しく認識していることがわかった。また被害経験の, ある教員は, ない教員に比べて予防教育を肯定的にとらえていることが結果から明らかとなった。

Synopsis : This research examined teachers' knowledge of DV and opinion about DV prevention education program from various aspects. Firstly, we compared teachers who educated adolescents (n=242) with non-teaching adults (n=481). Secondly, we examined differences between male teachers and female teachers. Likewise, comparison was made between teachers who were survivors of DV themselves and those with no DV experience. The comparison between teachers and non-teaching adults showed only one difference in knowledge of DV and opinion about DV prevention program. Concerning difference by gender it was found that female teachers had more correct knowledge about the characteristics of DV than their male counterparts. Moreover, teachers with DV experience were more positive about conducting DV prevention education program in school than non-experienced teachers.

Key words : domestic violence (DV), teacher, knowledge, prevention program.

1. 緒 言

日本でDV防止法が公布されたのは2001年4月¹⁾で, この12年間でDVという言葉は広く知られるようになった。被害の現状に関する, いちばん新しい大規模調査は2013年の東京都の若者層(18歳から29歳)における交際相手からの暴力に関する調査²⁾(交際相手がいた1,326人, 女性757人, 男性619人が対象)で, 女性が42.4%, 男性は31.3%が交際相手から暴力を受けたことが1度でもあると答えている。

教員へのDVに関する調査では, 友田ら³⁾が看護系大学の教員(349人)に, 質問紙調査を行っており, 看護系大学では64.3%, 短期大学では57.9%がDVに関する教育を実施していると報告している。看護教育の中でDVについての教育の必要性を認識している教員は86.5%と高かったが, 教える立場になると, 「教えるためのプログラムがない」「教えるだけの知識がない」など, 困難さを感じている教員が多いことを報告している。前小屋⁴⁾は某県の高校, 専門学校, 大学の教員(137人)を対象にDVについての質問紙調査

を行っており、「DV予防啓発を行うことに賛成」の教員は93.5%であったことを報告している。

先行研究からDV被害者が多く存在し、DVについての教育の必要性を教員が感じていることが明らかになりはじめた。

そこで本研究では、小学校（以下、小）、中学校（以下、中）高校（以下、高）、特別支援学校（以下、特支）の教員・元教員（以下、教員）がDVの知識や特徴をどの程度理解しているかを調査する。教員がDVというものを正しく認識をしていないと、教えることは困難だからである。

また、教員以外の大人と比べて、子どもや保護者と接することの多い教員は、DVに関する正しい認識や予防教育への関心が、高いかどうかを検討していくこととする。さらに、男性教員と女性教員との違い、DV被害経験がある教員と、ない教員で、DVに対する考え方や予防教育への関心に、どのような違いがあるかを、明らかにしていくことを目的とする。

2. 方法

1) 対象

2013年1月から9月に、教員（小、中、高、特支）242人と、比較群として、20歳以上の教員以外の大人481人に、機縁法でDV予防教育に関する、横断的質問紙調査を行った。教員は、夏の研修会場に訪れた教員にロビーで主旨を説明のうえ、配布をした。教員以外の大人には、了解を得られた8地域の公民館で配布をし、大学生や大学院生には東京、茨城、千葉の5校の学生に手渡しで依頼をした。回収率は76%（配布数943部、回収数723部）であった。

対象者の内訳は、教員は、小90人、中75人、高35人、特支42人で、男性77人、女性165人であった。年代は20代が、16人（男5、女11）、30代は65人（男28、女37）で、40代は93人（男27、女66）、50代以上は68人（男17、女51）で、年齢平均値は39.3歳（SD ± 0.99）であった。

教員以外の対象者は、男性149人、女性332人で、20代が314人（男114、女200）、30代が70人（男27、女43）、40代が35人（男3、女32）、50代

表1 DVの知識

1. DVという言葉を知っている。
2. DVとはどういうものなのか知っている。
あてはまる4点、少しあてはまる3点、あまりあてはまらない2点、あてはまらない1点

表2 DVの特徴に関する理解

*1. DVは相手とのケンカが原因で起こる。
*2. 女性から男性への暴力はDVではない。
3. DVは恋人同士などの間でも起こる。
4. DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。
5. DVの本質は相手を支配することである。
6. DV被害は、身近で誰にでも起こりうることである。
7. DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振うことが多い。
そう思う4点、少しそう思う3点、あまりそう思わない2点、そう思わない1点
*逆転項目 そう思う1点、少しそう思う2点、あまりそう思わない3点、そう思わない4点

が35人（男21、女24）、60代以上が27人（男3、女24）で年齢平均値は26.9歳（SD ± 1.26）であった。大学生・院生343人、専業主婦（主に高齢女性で退職後の余暇を過ごしている方や、家で親の介護をしている方）18人、非常勤職（パートタイムで家庭を持っている女性や、非正規雇用で職場を掛け持ちで働いている男女）44人、常勤職（正規雇用会社員：メーカー、金融、流通業、地方・国家公務員、ソーシャルワーカー、看護師、医師、医療療法士など）40人、その他（職種についての詳細は無記入）36人であった。質問紙を1枚ずつ、手渡しで配布し、無記名で封筒に入れて回収、または返信用封筒（個人が特定できないように無記名）による郵送法で回収をした。

2) 質問紙の内容

DVの知識では、DVという言葉を知っているか、どういうものかを知っているかの比較を行った。4件法で、いずれか1つに回答を求め、「あてはまる4点」「少しあてはまる3点」「あまりあてはまらない2点」「あてはまらない1点」で平均値を算出した。（表1）

表3 DV予防教育についての意見

-
1. DV予防教育の授業を、中学生や高校生の時に受けてみたかった。
 2. DV予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方が良い。
-
- そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点

「DVの特徴に関する理解」では、Bancroft⁵⁾の「DVとは何か」の解説を参考にしながら、質問を7項目、著者らで作成をした。「DVは両者のケンカが原因で起こるものではなく、相手を威圧するために暴力という方法を選んでいること、DVの本質は相手を支配すること、男女を問わず、だれでも被害者になる可能性があること、また、加害者は謝っても再び暴力を振ることが多いこと」などを盛り込んだ。(表2)

また、DV予防教育についての意見を求めることとした。内容は「DV予防教育の授業を中・高校生の時に受けたかったか」と、「中学・高校の授業の中でDV予防についての授業を実施したほうが良いか」の2項目の回答を求めた。(表3)

これらの質問は4件法で、いずれか1つに回答を求め、平均値を算出する時は「そう思う4点」「少しそう思う3点」「あまりそう思わない2点」「そう思わない1点」とした。*の逆転項目は「そう思う1点」「少しそう思う2点」「あまりそう思わない3点」「そう思わない4点」で算出した。DVの被害経験、DVに関する授業や講習の経験、DVの勉強(本など)の経験を、「ある・ない」の2件法で、回答を求めた。(表4)

3) データの分析

「DVの知識」「DVの特徴に関する理解」「予防教育についての意見」「DVに関することの経験」の項目において、教員と、教員以外の大人の比較、男性教員と女性教員の比較、被害経験の有無での平均値得点の比較は、Mann-Whitney U検定を行った。解析はIBM SPSS statistics 19.0を使用した。

4) 倫理的配慮

研究を依頼する際には、手渡しで行った。質問

表4 DVに関することの経験

-
1. DVまたはデートDVの被害経験がありますか。
 2. DVに関する授業や講習を受けたことがありますか。
 3. DVに関する勉強(本などで調べる)をしたことがありますか。
-
- 有・無の2件法

紙表紙で、研究の趣旨の説明を行い質問紙に答えるか否かは、自分の意思で決めて良いことを明記した。参加を辞退したことにより、不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払い、無記名で封筒に入れて提出すること、提供されたデータは研究目的以外には使用しないことを明記した。本研究は筑波大学医の倫理委員会の承認(第731号)を得て実施をした。

3. 結果

1) 教員242人と、教員以外の大人481人の比較

①DVの知識

「DVという言葉を知っている」という質問は、4点満点で、教員の平均値は3.79 (SD ± 0.67)、教員以外の平均値は3.73 (SD ± 0.78)で、両者ともに、高い割合でDVという言葉を知っていることが結果から示された。「DVとはどういうものなのか知っている」は、4点満点で、教員の平均値は3.56 (SD ± 0.73)で、教員以外の平均値は3.46 (SD ± 0.83)であった。2つの質問ともに、教員と、教員以外の大人の間で有意な平均値得点の差はみられなかった(Mann-Whitney U検定)。(表5)

②DVの特徴に関する理解

「DVの特徴に関する理解」について、教員と、教員以外の大人の間で検定を行ったところ、「1. DVは相手とのケンカが原因で起こる」で、教員が教員以外の大人に比べて、平均値得点が高かった(p<.05)。他の6項目では、両者の間に有意な差は、みられなかった(Mann-Whitney U検定)。(表6)

③DV予防教育についての意見

表5 DVの知識の比較

	1) 教員と、教員以外の大人 教員242人、教員以外481人			2) 教員の男女差 男77人、女165人			3) 教員の被害経験 有23人、無219人		
	教員 M(SD)	教員以外 M(SD)	p値	男 M(SD)	女 M(SD)	p値	有 M(SD)	無 M(SD)	p値
1. DVという言葉を知っている。	3.79 (±0.67)	3.73 (±0.78)	n.s.	3.80 (±0.58)	3.76 (±0.74)	n.s.	3.82 (±0.65)	3.77 (±0.70)	n.s.
2. DVとはどういうものなのか知っている。	3.56 (±0.73)	3.46 (±0.83)	n.s.	3.57 (±0.65)	3.56 (±0.77)	n.s.	3.69 (±0.70)	3.55 (±0.74)	n.s.

(Mann-Whitney U検定) 4点満点の平均値とSD

表6 DVの特徴に関する理解の比較

	1) 教員と、教員以外の大人 教員242人、教員以外481人			2) 教員の男女差 男77人、女165人			3) 教員の被害経験 有23人、無219人		
	教員 M(SD)	教員以外 M(SD)	p値	男 M(SD)	女 M(SD)	p値	有 M(SD)	無 M(SD)	p値
*1. DVは相手とのケンカが原因で起こる。	3.24 (±0.83)	3.10 (±0.89)	p<.05	2.94 (±0.91)	3.36 (±0.77)	p<.001,	3.21 (±0.95)	3.23 (±0.83)	n.s.
*2. 女性から男性への暴力はDVではない。	3.74 (±0.64)	3.73 (±0.61)	n.s.	3.74 (±0.63)	3.73 (±0.68)	n.s.	3.74 (±0.68)	3.73 (±0.66)	n.s.
3. DVは恋人同士などの間でも起こる	3.73 (±0.68)	3.69 (±0.69)	n.s.	3.62 (±0.74)	3.78 (±0.65)	p<.05,	3.73 (±0.86)	3.68 (±0.66)	n.s.
4. DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。	2.86 (±1.01)	2.80 (±0.99)	n.s.	2.79 (±0.98)	2.87 (±1.03)	n.s.	3.09 (±1.06)	2.82 (±1.01)	n.s.
5. DVの本質は相手を支配することである。	3.41 (±0.79)	3.28 (±0.87)	n.s.	3.25 (±0.85)	3.49 (±0.75)	p<.05,	3.65 (±0.77)	3.39 (±0.79)	n.s.
6. DV被害は、身近でだれにでも起こりうることである。	3.55 (±0.68)	3.48 (±0.74)	n.s.	3.55 (±0.64)	3.57 (±0.70)	n.s.	3.95 (±0.20)	3.52 (±0.70)	p<.01
7. DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い。	3.82 (±0.44)	3.75 (±0.54)	n.s.	3.65 (±0.55)	3.90 (±0.34)	p<.01,	3.86 (±0.45)	3.82 (±0.43)	n.s.

*逆転項目

(Mann-Whitney U検定) 4点満点の平均値とSD

「1. DV予防教育の授業を中学生・高校生の時に受けてみたかった」と「2. DV予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方が良い」の項目において、教員と、教員以外の大人の比較を行ったところ、2項目ともに、平均値得点において、有意な差はみられなかった (Mann-Whitney U検定)。(表7)

④DVに関することの経験

DV被害経験が「ある」と回答した教員は9.5%

(男3人、女20人)で教員以外の大人は16.6% (男性4人、女性76人)で、教員は、教員以外の大人と比べて被害経験が低かった (p<.05)。DVに関する授業や講習の経験が「ある」と回答した教員は29.8%で、教員以外の大人は38.5%で、教員は、教員以外の大人と比べて低かった (p<.05)。DVに関する勉強 (本など) の経験が「ある」と回答した教員は34.7%で、教員以外の大人は34.4%で有意な差はみられなかった (Mann-Whit-

表7 DV予防教育についての意見の比較

	1) 教員と、教員以外の大人 教員242人、教員以外481人			2) 教員の男女差 男77人、女165人			3) 教員の被害経験 有23人、無219人		
	教員 M(SD)	教員以外 M(SD)	p値	男 M(SD)	女 M(SD)	p値	有 M(SD)	無 M(SD)	p値
1. DV予防教育の授業を 中学生や高校生の時、 受けてみたかった。	3.22 (± 2.11)	3.00 (± 0.97)	n.s.	2.98 (± 0.86)	3.36 (± 2.49)	n.s.	3.60 (± 0.65)	3.20 (± 2.21)	p<.01
2. DV予防教育を中学や 高校で実施した方が良い。	3.41 (± 0.74)	3.37 (± 0.77)	n.s.	3.32 (± 0.82)	3.47 (± 0.68)	n.s.	3.73 (± 0.54)	3.39 (± 0.73)	p<.05

(Mann-Whitney U検定) 4点満点の平均値とSD

表8 教員と、教員以外の大人のDVに関することの経験

	教員n=242		教員以外n=481		教員と、教員以 外の大人の差 p値
	有 n (%)	無 n (%)	有 n (%)	無 n (%)	
1. DVの被害経験	23 (9.5) (男性3人含む)	219 (90.5)	80 (16.6) (男性4人含む)	401 (83.4)	p<.05
2. DVに関する授業や講習の経験	72 (29.8)	170 (70.2)	185 (38.5)	296 (61.5)	p<.05
3. DVに関する勉強(本など)の経験	84 (34.7)	158 (65.3)	165 (34.4)	315 (65.6)	n.s.

*p<.05, n.s.=not significant

(Mann-Whitney U検定)

ney U検定)。(表8)

2) 男性教員77人と、女性教員165人の比較

①DVの知識

「DVという言葉を知っている」は4点満点で、男性教員の平均値は3.80 (SD ± 0.58)、女性教員の平均値は3.76 (SD ± 0.74)であった。「DVとはどういうものなのか知っている」では4点満点で、男性教員の平均値は3.57 (SD ± 0.65)で、女性教員の平均値は3.56 (SD ± 0.77)であった。2つの質問ともに男女の教員間で有意な平均値得点の差はみられなかった (Mann-Whitney U検定)。(表5)

②DVの特徴に関する理解

「DVの特徴に関する理解」について、男女の教員の間で検定を行ったところ、「1. DVは相手とのケンカが原因で起こる」、「3. DVは恋人同士の間でも起こる」、「5. DVの本質は相手を支配することである」、「7. DVの加害者は暴力を振った後、謝ることがあるが再び暴力を振ることが多い」で、女性教員が男性教員に比べて、平均値得点が高かった (Mann-Whitney U検定, 1.

(p<.001), 3. (p<.05), 5. (p<.05), 7. (p<.01))。他の3項目では、男女の教員間に有意な差はみられなかった。(表6)

③DV予防教育についての意見

「1. DV予防教育の授業を中学生・高校生の時に受けてみたかった」と「2. DV予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方が良い」の項目において、男女の教員間の比較を行ったところ、2項目ともに、平均値得点において、有意な差はみられなかった (Mann-Whitney U検定)。(表7)

3) DV被害経験が、ある教員23人と、ない教員219人の比較

①DVの知識

「DVという言葉を知っている」は4点満点で、被害経験がある教員の平均値は3.82 (SD ± 0.65)、ない教員の平均値は3.77 (SD ± 0.70)であった。「DVとはどういうものなのか知っている」では4点満点で、ある教員の平均値は3.69 (SD ± 0.70)で、ない教員の平均値は3.55 (SD ± 0.74)であった。2つの質問ともに、男女の教員間で有意な平均値得点の差はみられなかった (Mann-Whitney

U検定)。(表5)

②DVの特徴に関する理解

「DVの特徴に関する理解」について、被害経験の「ある・なし」で検定を行ったところ、「1. DV被害は身近でだれにでも起こりうることであり、被害経験がある教員が、ない教員に比べて、平均値得点が高かった (Mann-Whitney U検定, $p<.01$)。他の6項目では、被害経験がある教員と、ない教員の間に有意な差はみられなかった。(表6)

③DV予防教育についての意見

「1. DV予防教育の授業を中学生・高校生の時に受けてみたかった」と「2. DV予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方がよい」の項目において、被害経験の「ある・なし」で検定を行ったところ、被害経験がある教員が、ない教員に比べて、両項目ともに、平均値得点が高かった [Mann-Whitney U検定 (Mann-Whitney U検定, 1. $p<.001$), 2. $p<.05$)]。(表7)

4. 考 察

本研究は、第一段階で、教員の242人と、教員以外の大人481人の比較を行った。知識では「DVという言葉は知っている」、「DVとはどういうものなのか知っている」という質問に対して、教員も、教員以外の大人も高い平均値得点で、両者に差はみられなかった。このことから、ほとんどの大人がDVを知っていると思われる。「DVの特徴に関する理解」では、「1. DVは相手とのケンカが原因で起こる」という質問に対して、教員は、教員以外の大人と比べて、より正しい認識を持っていることがわかった。この質問は、DVの原因が、単なるケンカで始まるのではなく、加害者が相手を支配するために暴力という手段を選んでいることを、多くの教員が認識しているからこの結果であると思われる。思春期世代の生徒や保護者と接することが多い教員だからこそ、教員以外の大人に比べて、DVの特徴を理解しているのだろう。山田ら⁶⁾は某県で行った高校生の調査で、DV (Dating Violence) 被害を受けた高校生の女子は33.4%、男子は29.8%と報告している。

このように、思春期世代の高い被害率から、教員もDVについて学習が、必要不可欠であると思われる。

予防教育についての意見では、教員と、教員以外の大人に差はみられなかったが、両者ともに、予防教育に肯定的な意見を多くの大人が持っていることが今回の調査から明らかとなった。

研修の機会が教員以外の大人より、教員のほうが低いことは課題である。教員にDVの研修会や講習を提供していけば、児童・生徒・保護者でDV被害に遭っている人の良き理解者となり早期発見と支援につながるとされる。

第二段階では男性教員と女性教員の差、DV被害経験の「あり・なし」での比較を行った。知識においては「DVという言葉を知っている」「DVとはどういうものなのか知っている」では男性教員と女性教員の間に差はみられず、被害経験による差もみられなかった。

しかし、より詳しい内容の質問である「DVの特徴に関する理解」の7項目では、4項目で女性教員が、男性教員よりDVの特徴について正しい認識を持っていることがわかった。「DVの本質はケンカなどの単純な理由ではなく、支配であり、謝るが再び暴力を振うのも支配を強めるためであること。恋人同士の間でも起こること」を、女性教員が、より高く認識していることは、被害者が女性に多いことが影響をしていると思われる。女性教員のこれらのDVについての深い認識は生徒たちをDVから守るために重要であると思われる。また男性教員においては、教員研修などでDV問題について研修可能な体制を整えることが大切であると思われる。加害者になりやすい男子生徒の模範となるのは、やはり男性教員であるだろう。だからこそ男性教員にDVの問題に関心を持ってほしいと考える。男性と女性に違いが生じるのは教員だけではなく、一般的なことかもしれない。しかし、思春期の子どもを教育する立場だからこそ、男女を問わず、DVの問題に関心を持つ必要があると思われる。

予防教育についての意見では、男女の教員の間で差はみられず、男性教員も女性教員も高い割合

で「DV予防教育を中学や高校で実施した方が良い」と思っていることが明らかとなった。自由意見の中で、多く見られた意見は「広く学校教育の中での普及の必要がある」、「異性間の交際が始まる前の段階が良い」、「保護者からのDVの話も多い」であった。また、「DVの問題を考えさせることは、家族や恋人との関係性を考える教育的材料になる」という具体的な意見もみられた。

本研究に協力をしてくださった教員の中にも、23人(9.5%)の方がDV被害を受けていることが結果から示された。そこで被害経験がある教員と、ない教員でDVに関する認識がどのように違うかの検討も行った。知識において、差はみられなかったが、より詳しい内容の質問である「DVの特徴に関する理解」では、「DV被害はだれにでも起こることである」という認識が、被害経験のない教員には、やや不足していることが明らかとなった。しかし他の6項目では、被害経験のある教員と、ない教員の間で差がみられなかったことを考えると、経験がある教員の、被害後のケアが十分に行き届いているかが、心配される。暴力の責任は加害者側にすべてあることを認識することが大切である。予防教育についての意見においても、被害経験のある教員は、「予防教育を、中・高校生の時に受けてみたかった」、「予防教育を実施した方が良い」と強く感じており、被害経験のない教員との意見に差がみられた。これは「自身が直面してしまったような辛い経験を生徒には遭遇してほしくない。被害者にも加害者にもなってほしくない」という教育者としての強い思いであると考えられる。

教員という存在は、子どもたちがかわる大人の中のひとりとして、大きな影響力があると思われる。家庭内でDVを見て育っている児童・生徒の気持ちに気付いていくためにも、教員も、生徒たちも、DVについて考えてみる時間を、学校という場でつくっていくことが大切であると思われる。

5. まとめと研究の限界

本研究から、教員も教員以外の大人も、DVという言葉や大枠な内容は、多くの人が知っていることが示された。また、予防教育を中学や高校で実施したほうが良いと、教員に限らず、多くの大人が思っていることも示された。

しかし、本研究はDV予防教育の主旨を説明したうえで、研究協力に同意をくださった方のみに質問紙を配布しているうえでの、結果であることを考慮にいれなければならない。また教員と、教員以外の大人を比較する際に平均年齢の違いが12歳あった。これは教員以外の大人が大学生・院生が343人、それ以外の社会人が138人であったためである。教員の平均年齢に近い研究協力者の抽出が課題であったと思われる。

謝辞：本研究のアンケート調査にご協力頂いた、皆様に心より感謝致します。

文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局：配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律の概要，2008.
- 2) 東京都生活文化局：若者層における交際相手からの暴力に関する調査報告書，2013.
- 3) 友田尋子，高田昌代：わが国の看護教育におけるDVに関する教育の実態と教員意識調査，大阪市立大学「大学教育」，5(2)：13-21，2008.
- 4) 前小屋千絵：デートDVと若者たち－お互いを大切にすることの関係とは－，38-40，NPO法人「らいず」，茨城，2013.
- 5) Bancroft L.,高橋睦子，中島幸子ほか[監訳]：DV・虐待加害者の実態を知る，22-110，明石書房，東京，2008.
- 6) 山田典子，山田真司：高校生のDating Violenceの特性と課題，母性衛生，51(2)，311-319，2010.

(受付：平成25年10月17日)
(受理：平成26年3月7日)